聖教の形と場
――敦煌及び日本の古写・刊本――

石塚 晴通
北海道大学

(一)

日本には7世紀以来の漢文古写経や8世紀後期の百万塔陀羅尼印本が数多く現存しているが、中国大陸や朝鮮半島では古写経がそのまま伝来することは少なかった(その原因として、日本では古い標準がそのまま定着したり新しい標準が生じても古い標準を併存させる傾向が強いのに対して、大陸・半島では新しい標準が生じると古い標準は淘汰されてきたことに関係が深い)。それが、20世紀の初めに敦煌本が発見され、4万点を越す漢文古写本が出現して事態は一変した。

敦煌本は、大部分が仏典聖教であり、4－11世紀に亘る4万点を越す資料を概観すると、各時代の標準の存在やそれらの推移及び文化史的背景が知られる。

隋より古い資料はほとんどが北朝写経であり、この中に数少ない南朝写経が交じる。両者は、書體・字體、用筆・用紙などが異なり、一見して識別し得る。隋写経は南朝写経に似通う要素もあるが、用紙が独特である。併行して高昌写経が少量ながら存在し、書體・用紙が隋唐初写経とは異なる。初唐宮廷写経には、書體・字體、用筆・用紙などに強固な標準が存する。概して、7世紀中期から8世紀中期までの敦煌本は中国中央文化を反映するが、8世紀後期の吐蕃占領期以後の敦煌本は全く異質なものとなる。用筆、用紙、学風などが中国中央文化とは大きく異なったものとなっていく。

各時代の標準やその推移が判明すると、現実には多数存在する敦煌本の20世紀偽写本の識別に大いに役立つ。偽写本には2種類あり、20世紀初頭に敦煌で製造され各国探検隊に購入されたものと後に天津等の中国内地で製造されたものとがある。

日本の古写経では、字體等は中国初唐の標準を定着させ、以後中国の標準が変遷しても原則としては変らなかった。これは漢字音の面で、中国の古い標準音である呉音・漢音を定着させ、以後中国の標準音が変遷しても原則として変えなかったことと似通う。宋版が出現すると、日本でも珍重されて大量に輸入されたが、字體等の標準を変えるには至らなかった。

(二)

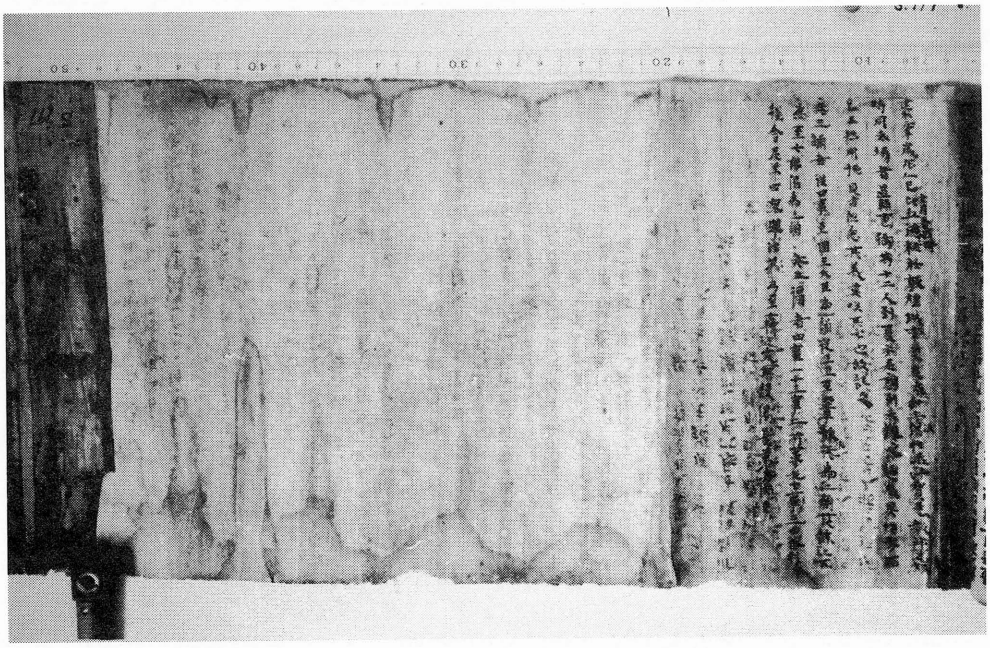
1．大英図書館蔵S797十誦比丘波羅提木叉戒本　406写

(北凉)建初2年(406AD)徳裕書写、巻子装、故麻布紙、縦24.5cm(界高23cm)横42.5cm(28～29行)の料紙を13紙継、墨点(標目科段、5世紀初、徳裕)、巻末識語「第七巻」「比徳裕書」「一校竟」。

スタイン蒐集敦煌文献中最古の紀年を持つ写本として夙に有名である。両面に書写されてをり、大英図書館では十誦比丘波羅提木叉戒本の方を表、十誦律の方を裏としている(ジャイルズ目録参照)。料紙は、故(ふる)い麻布から製した故麻布紙で不染。用筆は鹿毫の如き剛毛筆。天地の余白が極めて少なく、一行の字詰、一紙の行詰などの形式が未だ整わず。表裏共に標目科段の墨点が加点されていて、実用書である。

〔参考〕Lionel Giles"Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum"p.132~133,大英博物館、1957

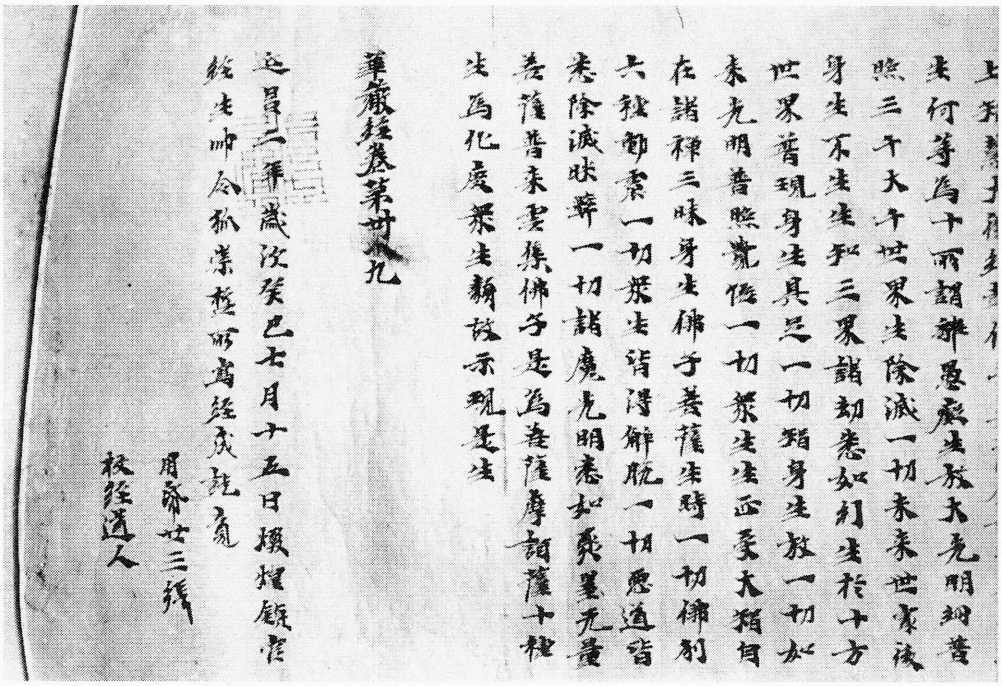
石塚晴通『墨美201－楼蘭・敦煌の加点本』、図三、図四、墨美社、1970



2．大英図書館蔵Ｓ9141 華厳経巻第三十九　513写

(北魏)延昌２年(513AD)令孤崇哲書写、巻子装、故麻布紙黄染、奥書「延昌二年歳次癸巳七月十五日燉煌鎮官／経世師令孤崇哲所寫経成訖竟／用帋廿三紙／校経道人」。

北朝写経の名筆の誉高い令孤崇哲の書写本であり、典型的北朝写経である。北魏の敦煌鎮で行われた官営写経事業の監督者自身の筆跡である。縦25.5cm 横37cmの故麻布紙を黄色に染めて、一行17字詰、一紙22行詰に書写する形式が整っている。



2付．大英図書館蔵Ｓ1427 誠実論巻第十四　511写

(北魏)永平４年(511AD)曹法壽書写、巻子装、故麻布紙黄染、芨芨草簾使用、縦26cm(界高19cm、17字詰)横52cm(28行詰)の料紙を25紙継、奥書「経生曹法壽所寫　用帋廿五張／永平四年歳次辛卯七月廿五日燉煌鎮官経生曹法壽所寫論成訖／典経師令孤崇哲／校経道人恵顯」。

同じく敦煌鎮官営写経生の曹法壽の筆跡である。紙漉きの簾(すだれ)が竹製ではなく芨芨草製であって波打ってをり、また鹿毫筆を用いた令孤崇哲一門の筆法がよく窺われる。

〔参考〕藤枝晃『墨美156－北魏敦煌本誠実論』、p.96　墨美社、1966

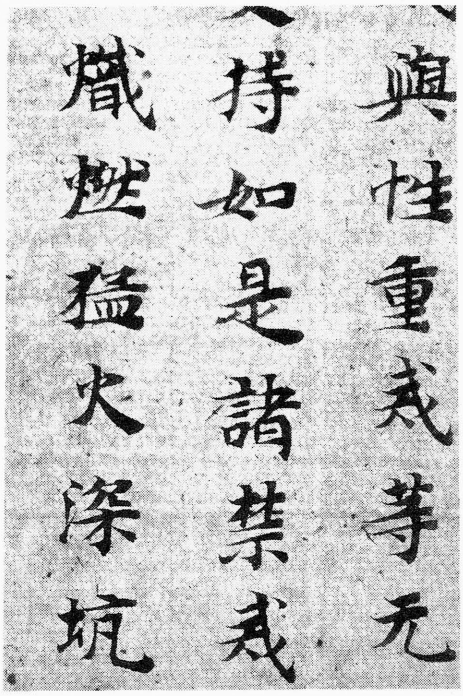
藤枝晃『文字の文化史』p.157~159　岩波書店、1971

3．大英図書館蔵S81大般涅槃経巻第十一　506写

(梁)天監5年(506 AD)書写、巻子装、薄手生漉麻紙歟黄染、竹簾使用、縦26.7cm(界高20cm、17字詰)横49.2cm(29行詰)の料紙を用い全693.5cm、奥書「天監五年七月廿五日佛弟子譙／良顒奉為　亡父於荊州竹林寺／敬造大般涅槃経一部願七世／含識速登法王無畏之地比丘／僧倫龔弘亮二人為營」。

敦煌本では例の少ない南朝写経の典型である。故麻布からではなく生の麻の繊維から直接竹製簾で漉いたと見られる薄手の麻紙を黄色に染め、兎毫の如き軟毛筆(所謂兎毫竹管歟)を用いて書写している。書体も隋唐の楷書に大分近く、同じ時代の北朝写経(2,2付)と比べると、書写材料・書体共に際立った違いを見せている。

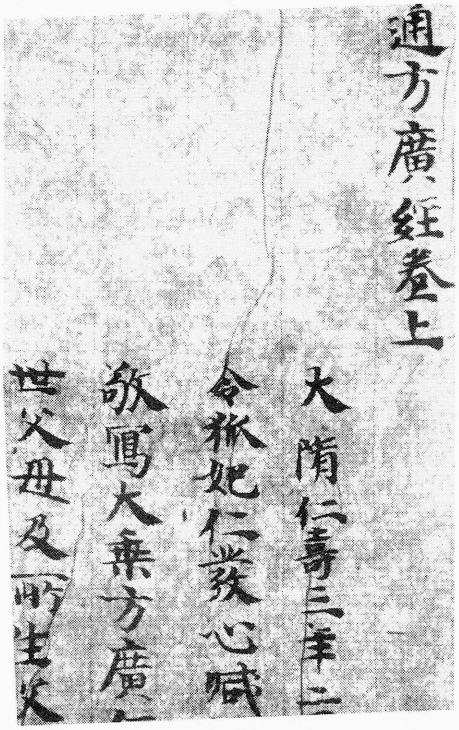
〔参考〕藤枝晃『文字の文化史』p.160~163,岩波書店、1971



4．大英図書館蔵Ｓ4553大通方広経　603写

(隋)仁寿3年(603AD)書写、巻子装、薄手生漉麻紙黄染、竹簾使用、縦25.1cm(界高18.2cm)横50.5cm(31行詰)の料紙を用いて全564cm、奥書「大隋仁壽三年二月十四日清信女／令孤妃仁發心減割衣資之分／敬寫大乘方廣経一部願令七／世父母及所生父母見在家眷／所生之處値佛聞法与善知／識共相値遇命過已後託生／西方无量壽國及法界衆生／同沾斯願／清信女任是々亦勸化助寫供／養／妃仁息男呂勝遵持心供養／息女阿謾存心供養並願／同上願」。

典型的隋写経であり、薄手生漉麻紙黄染、竹製簾使用、兎毫竹管筆であることが見てとれる。南北朝を統一した隋は、写経の形態としては南朝風を基本としたのである。



5．大英図書館蔵Ｓ2838維摩経巻下　637写

(高昌)延壽14年(637AD)令孤善願書写、巻子装、縦27.4㎝(界高20.2㎝)横45.4㎝(22行詰)の料紙を用いて全975㎝、厚手故麻布紙黄染、芨芨草簾使用、奥書「経生令孤善願寫／曹法師法恵校／法華齋主大僧平事沙門法煥定／延壽十四年歳次丁酉五月三日清信女　稽首歸命常住三寶蓋聞／(以下６行略)」。

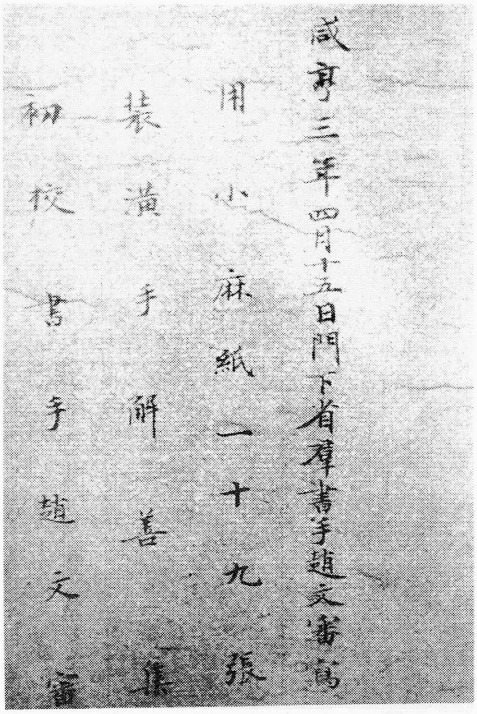
5付．京都国立博物館蔵Ｂ甲425大品経巻第廿八　高昌(６世紀末 ７世紀初)写

高昌書写、巻子装、縦26.1㎝横175.3㎝、故麻布紙黄染、芨芨草簾使用、奥書ナシ。大谷探検隊蒐集品。

同じ時期の隋写経と異なり、料紙が故麻布紙であり、芨芨草製簾を用いている。書体も北朝写経に通じる固さがある。

〔参考〕京都国立博物館『京都国立博物館蔵品図版目録―書跡編　中国・朝鮮』p.5, 1996

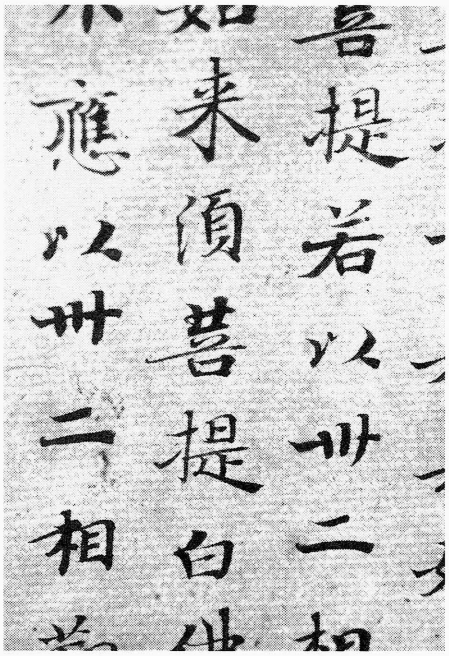
6．大英図書館蔵Ｓ4209妙法蓮華経巻第三　672写



(唐)咸亨三年(672)趙文審書写、巻子装、厚手生漉麻紙黄染、竹簾使用、兎毫竹管、縦26.1㎝(界高20.2㎝)横45.5㎝の料紙を元来19紙継で現在は全808㎝、奥書「咸亨三年四月十五日門下省羣書手趙文審寫／用小麻紙一十九張／装潢手解善集／初校書手趙文審／再校福林寺僧智蔵／三校福林寺僧智興／詳閲太原寺大徳神符／詳閲太原寺大徳嘉尚／詳閲太原寺主慧立／詳閲太原寺上座道成／判官少府監掌冶署令向義感／使大中大夫守工部侍郎永興縣開國公虞昶監」。

所謂宮廷写経であり、正式写本の典型である。官営の大組織である写経所で制作されたもので、生の麻の繊維と見分けられないまでに細かく叩解されて、極めて細かい簀目の竹製簾を使用して厚手に漉かれて安定した黄金色に染められた料紙、兎毫竹管を用いて墨継ぎを殆ど見せないまでの丁寧な書写、楷書の完成相である書体、本文字体の正確さなど、あらゆる面で漢文写経の頂点と言い得る。

6付．大英図書館蔵S36金剛般若波羅蜜経　672写

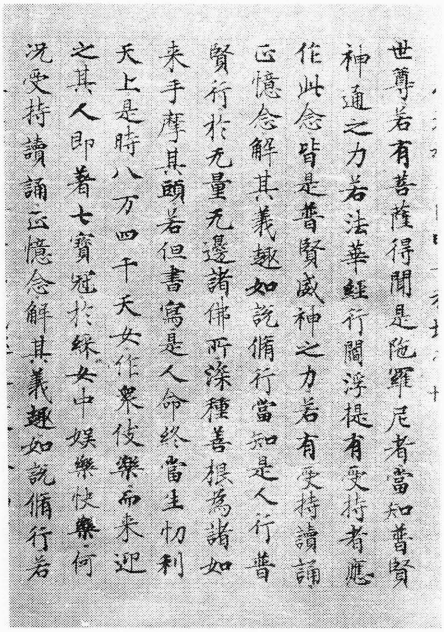


(唐)咸亨３年(672AD)呉元禮書写、巻子装、厚手生漉麻紙黄染、竹簾使用、兎毫竹管、縦25.5㎝(界高20.0㎝)横45.0㎝(31行詰)の料紙を元来12紙継で現在は全411.5㎝、奥書「咸亨三年五月十九日左春坊楷書呉元禮寫／(以下11行略)」。

これも初唐宮廷写経で、宮廷図書館である左春坊の専属写字生(楷書手)呉元禮の見事な筆跡を拡大して示す。この安定した初唐標準字体が日本に移入され、日本の標準字体の源泉となり、以後近世の印刷本出現の前まで、長く定着したのである。

〔参考〕石塚晴通「漢字字體の日本的標準」、『國語と國文学』76-5号、1999

7．大英図書館蔵S2577 妙法蓮華経巻第八　7世紀末写



(唐)7世紀末書写、巻子装、生漉麻紙黄染、竹簾使用、兎毫竹管、縦26.5cm(界高19.7cm、17字詰)横48.0cm(28行詰)の料紙を14紙継全648cm、巻末識語(朱)「余為初學讀此経者不識文句故馮點之亦看科／段亦不論起盡多以四字為句若有四字外句者然點々始／之但是四字句者絶不加點別為作為(雙度)委別行作行(閣更)／如此之流聊後分別後之見者勿怪下朱言錯／點也」。

巻末に加点識語が有る如く、句読・科段、また其の字が原義ではなく派生義であることを示す破音で字の中央に加点するⅠ型破音の点などが、朱で詳密に加点されている高度学習本である。高度な学習内容を示しているが、初唐宮廷写経と比べると字体に若干の揺れが混じるなど、私的寫本である。

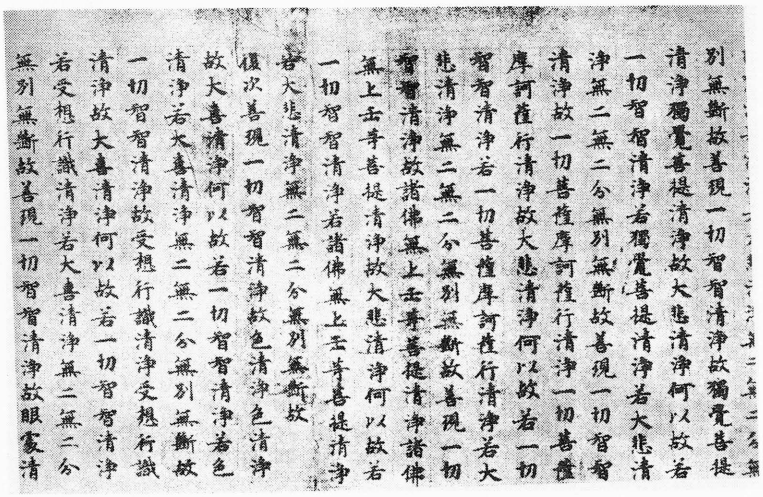
〔参考〕石塚晴通『墨美201－桜蘭・敦煌の加点本』、p.2~3,23、墨美社、1970

8．フランス国立図書館蔵P2114 大般若経巻第二十七　7世紀末写

(唐)則天武后期書写、巻子装、厚手生漉麻紙黄染、竹簾使用、兎毫竹管、縦25.5cm(界高20cm、17字詰)横49.5~49.9(28行詰)の料紙を18紙継全877.8cm、紙縫(背)に「建章／監之印」朱印。

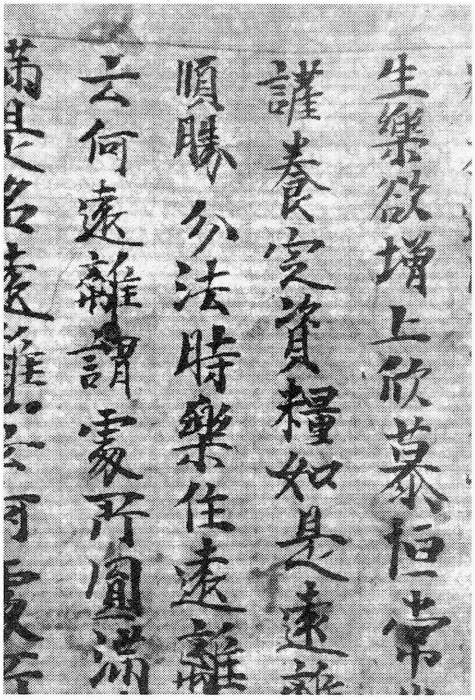
典型的則天武后期写経である。黄金色麻紙、ゆったりとした楷書など、文化成熟期の写経の形態を呈する。尚、敦煌本の中に毛筆書きの大般若経は希であり、多くは葦筆・木筆書きの吐蕃期以降の写経である(所謂敦煌本コレクション中に、毛筆書きの大般若経が存する場合、多くは二十世紀偽写本か日本古写経であるので、注意を要する)。

〔参考〕石塚晴通「敦煌文獻中混入日本抄本及偽抄本」、二十一世紀敦煌學國際學術研討會、台湾、2001



9．大英図書館蔵S5309瑜伽師地論巻第三十　857写

(唐)大中11年(857AD)恒安書写、巻子装、故麻布紙、芨芨草簾使用、葦筆、縦26.5～27.5㎝(界高20.5㎝、16～18字詰)横45.5㎝(28行詰)の料紙を17紙継全762㎝、朱点(句読、科段、引用、大中11年、恒安)、奥書「比丘恒安随聴論本」、(朱)「大唐大中十一年歳次丁丑六月廿二日國大徳三蔵法師沙門法成／於沙州開元寺説畢記」。

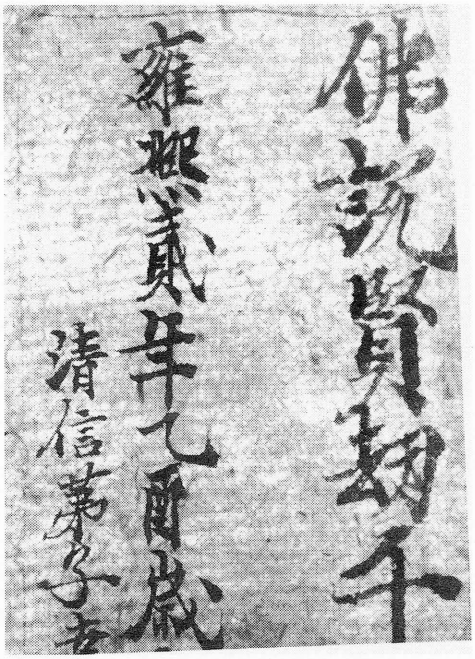


チベット人が敦煌を支配した吐蕃期には、生漉麻紙ではなく故麻布紙となり、竹製簾ではなく芨芨草製簾で紙が漉かれ、用筆も兎毫筆ではなく葦筆・木筆となり、写経の形態が前代とは大きく異なったものとなった。学習形態も異なったものとなったが、この資料の如く沙州開元寺に於ける法成の講義を随聴した弟子集団が共通の符号を用いた加点をしたりして、中国中央文化とは異なる高度な学習が行われたことを示す例もある。

〔参考〕上山大峻「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究」、『東方學報』38,39冊、1967,1968　石塚晴通『墨美201―楼蘭・敦煌の加点本』p.37、墨美社、1970

10．大英図書館蔵S4601佛説賢劫千仏名経巻上　986写

(宋)雍熙２年(986AD)康文興書写、巻子装、故麻布紙、芨芨草簾使用、葦筆、縦30.5㎝横1082㎝、奥書「雍熙貳年乙酉歳十一月廿八日書寫押牙康文興自手墨書／(以下５行略)」。



９世紀中期に、張義潮が敦煌をチベット人支配から取り返したとされるが、文化的には敦煌が再び中国中央文化を反映する相を呈することはなかった。この資料も、故麻布紙、芨芨草簾使用、葦筆書きという写経の形態であり、宋中央文化とはかけ離れたものである。

11. 大英図書館蔵S6776 妙法蓮華経巻第七　20世紀初写

20世紀初書写、巻子装、黄麻紙風、縦25.2㎝(界高20.1㎝)横47.8㎝(28行詰)の料紙を用いて全709㎝、奥書ナシ。

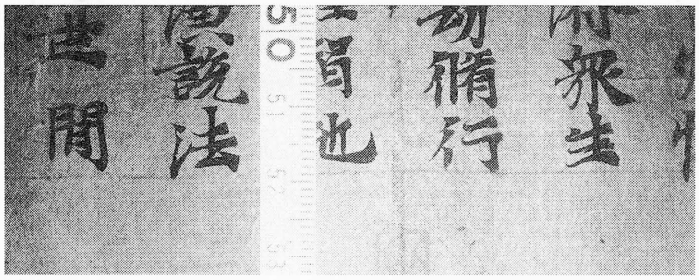
20世紀初期に製作された偽写本である。敦煌本の偽写本には2種類あり、一つは敦煌周辺で製作されて各国探検隊等に蒐集されたもの、他の一つは天津等の中国内地で製作されたものである。この資料は前者であり、スタイン第三次探検隊によって蒐集されたものである。一見7世紀末頃の写経のようであるが、料紙の黄染が不適格であり(黄染の成分―砒素等―分析によって科学的に判定する方法も開発されつつある)、字体の標準を混交(「於」字は、手偏の如く記するのが初唐の標準であるが、挿図後ろから3行目の如く「方」と記したものが混じっている)したりして、偽写本と分かる。

〔参考〕石塚晴通「敦煌文獻中混入日本抄本及偽抄本」、二十一世紀敦煌學國際學術研討會、台湾、2001

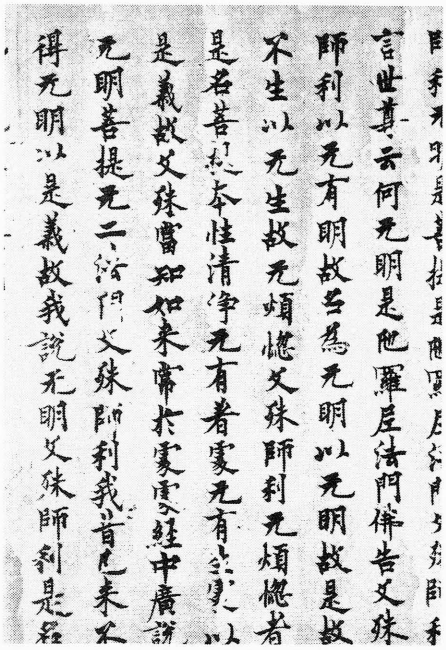
12. 三井文庫蔵025-014-002華厳経巻第四十六　20世紀初写

20世紀初書写、巻子装、生漉樹生漉皮紙黄染、非剛毛筆、奥書「延昌二年経生和常太寫　用昏十九」「大随(隋)開皇三年歳在癸卯五月十五日武候帥／都督前治會稽縣令宋紹演因遭母／喪亭(停)私治服發願讀華厳経一部大集経／一部法華経一部金光明経一部仁王経一部／薬師経冊九遍願國主興隆八表歸一／兵甲休息又願亡父母託生西方无(天？)壽國／常聞正法己身福慶従心遇善知識／家眷大小康休一切含生普蒙斯願」。

天津製と見られる中国内地製作の偽写本である。1914～1920年甘粛省に在って要職を歴任し1920年以降天津に住した張廣建旧蔵本であり、1924年北京に於ける甲子年江西賑災書画古物展覧会に此の資料が出品されているので、1920～1924年の間の入手と見られ



る。故麻布紙ではなく生漉の樹皮紙であり、書体・字体が北魏延昌期のものとは異なり(cf.挿図2)、鹿毫筆の如き剛毛筆ではない軟らかい毛の筆を用いているので延昌期北朝写本でないことは容易に見分けられるが、隋開皇三年の奥書のみであったならば隋写経として通りそうな出来栄えである。



13. 小川雅人氏蔵金剛場陀羅尼経　686写

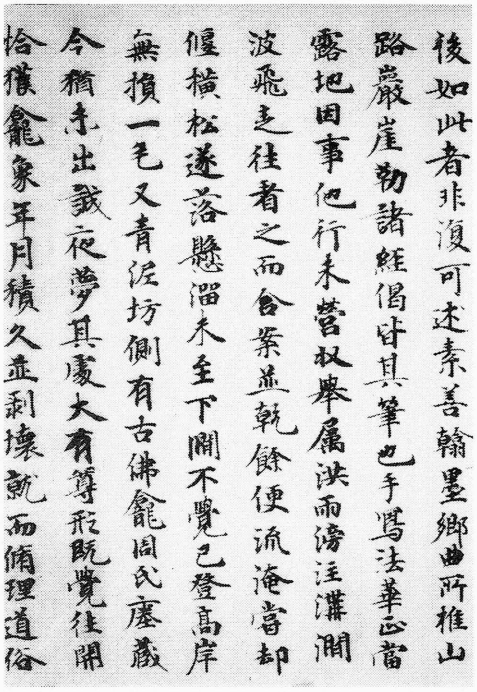
天武朝丙戌年(686)書写、巻子装、樹皮紙黄染、縦26.1cm横712.1cm、奥書「歳次丙戌年五月川内國志貴評内知識為七世父母及／一切衆生敬造金剛場陀羅尼経一部籍此善因往生浄／土終成正覺　　教化僧寳林」。

日本最古の紀年を有する写経である。書体・字体の面で唐初の歐陽詢(通)体に似通ってをり、中国の一昔前の標準が日本で用いられている例である。

14. 京都国立博物館蔵B甲54続高僧伝巻第二十八　740写

奈良時代天平12年(740AD)書写、巻子装、生漉麻紙黄染、縦26.7cm横751.0cm、奥書「皇后藤原氏光明子奉為／(以下10行略)／天平十二年五月一日記」。

五月一日経の一であり、典型的天平写経である。この一切経の底本は玄昉将来経と言われているが、本資料を見ると初唐宮廷写経の標準字体が少々変化して、後に開成石経標準字体に至る間の小異を反映している。

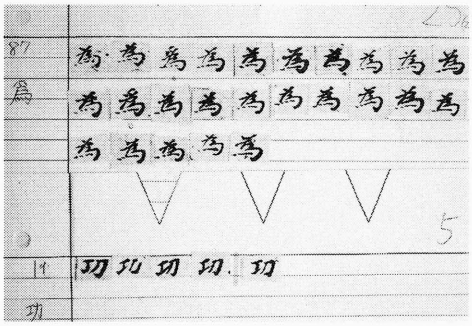


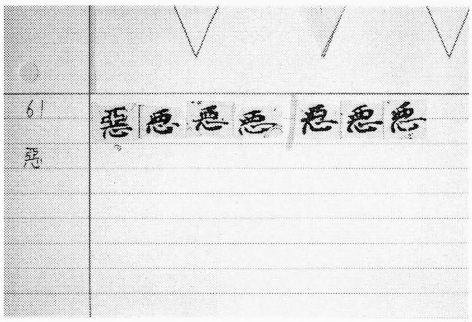
15．京都国立博物館蔵 B甲164大教王経巻第一　院政期(12世紀初)写

院政期(12世紀初)書写、巻子装、楮紙黄染、縦24.1cm横565.0cm、巻首「福州等覺禪院住持傳法廣慧大師達杲収印経板頭錢恭爲／今上皇帝祝延　聖壽闔郡官僚同資禄位彫造／大蔵経印板計五百餘函時大觀四年八月　日謹題」、巻末識語「三校了」、巻首「高山寺」朱印。

15付１、２．同上資料字体カード

北宋東禅寺版を日本の院政期に書写したものである。日本の院政期・鎌倉時代は宋版の輸入に熱心で珍重したが、宋版で定着した開成石経の中国新標準字体に従わず、初唐標準字体に基づく日本の伝統的標準字体に直して書写した箇所が多い。「爲」は全25例共伝統的標準字体「為」で、宋版の標準字体「爲」は１例もない。「功」も同様である。「惡」は、最初の１例のみ宋版の標準字体で書写したが、他は総て日本の伝統的標準字体に直している。





(三)

結局、敦煌本は隋以前は中国南朝や文化の中心地帯とは異る北朝風の文化を反映し、また781年の吐蕃侵攻以後も中国中央文化とは大きく異なる。中央アジアの文化交流地帯の姿である。7世紀中期―8世紀中期は、敦煌にも唐中央文化が普及し、唐正式宮廷写経も40点以上もたらされ、また論語・漢書・文選等の典型的漢籍も少なからず存した。而も、それらの写本には例外なく学習の跡が見られ、破音の加点等の高度な学問が敦煌に於いても行われていたことが知られる。幸いなことに、日本と中国との関係で言えば、漢字字體の標準と言い、漢音の漢字音と言い、その当時の中国の標準が日本の標準となり、以後長く固定したので、正しく日本文化の故郷を現実に確認できるのが、この時期の敦煌本である。日本の奈良時代は、このように極めて国際的であったが、平安時代になっても文献文化の面では原則として古い文化を守り、中国に於けるその後の変遷を反映しなくなった。以後も江戸時代まで、基本的には変わらなかったのである。

【Abstract】

Figure and Place of the Sacred Sutra
— Old Manuscripts in Dunhuang and Japan —

ISHIZUKA Harumichi
Hokkaido University

While numerous old Chinese manuscripts from 7th century, or One million Pagodas Dharani printed books from late 8th century can be found in Japan today, very few in China or Korea has been transmitted up to day. (As to the reason of that situation it could be said that while in Japan the older standards get fixated as they were, or even when new standards arise the older standards would be preserved together with them, in the case of China or Korea the older standards have been discriminated against with the rise of newer ones.) In the early 20th century, Dunhuang Manuscripts have been found, and more than forty thousand old Chinese manuscripts appeared, and the situation has undergone a change.

Main part of the Dunhuang manuscripts are Buddhist scriptures of sacred teachings, and more than forty thousand materials that date from fourth to eleventh centuries, once outlined, could allow us to know the existence and change of standards in each period and the cultural history scene. The materials that antedate Sui Dynasty are mostly Northern Dynasty sutra copies, with few numbers of Southern dynasty sutras. The form and standard of writing Chinese characters, brush and paper etc. are different; hence these two can be distinguished at first sight. Sui sutras are revealed certain points that resembles the Southern Dynasty sutras, yet the paper used are peculiar. In the early Tang Court sutras there are strict standards concerning form and standard of writing Chinese characters, the brush, and the paper used. In general the Dunhuang manuscripts from mid-seventh century up to mid-eighth century reflect the Central Culture of China, yet those after the period of the invasion of Tibetan people in late eighth century are totally of a different character. The brush and the paper used, or the academic traditions start to become considerably different from the Central Culture of China.

As the standards of each period, and their change become clearer, it would be of great help to distinguish the numerous twentieth century Dunghuang manuscript forgeries.

In the old sutra manuscripts of Japan, the standards of early Tang were fixated concerning standards of writing Chinese characters, etc, and these standards did not alter even after they were changed in China. This resembles to the situation concerning the pronunciations of Sino-Japanese in which were *Go-on*, and *Kan-on* were fixed and preserved even after they underwent change in China.